

近況と「N」の話

原爆文学研究会十周年に寄せて

山本 昭宏

東日本大震災とそれがもたらした津波による原発災害以後、原発については巷間喧しい論議が起こり、それは今も継続している。それらに触れて感じたこと、考えたことを記して、十周年エッセイの代わりとしたい。

議論の高まりを受けて、それまで核エネルギーの問題についてとくに何も発言していなかった者も、慌てて勉強を始め、遅れないように発言を始めたように感じ、当初はなんとなく不愉快な気持ちになった。メディア知識人界のゲームに新たな種目が付け加わっただけのように思えたからだ。メディア知識人やメディアが核エネルギーの話題をこぞって口にするのは、それをどれだけ誠実な顔で語り、高尚な文体で書いたとしても、核エネルギーを「食物」にしている点で、批判されている企業や団体と変わるところがないように思えて仕方なかった。

この子供じみていて、単純な、しかし逃れがたい不愉快な気持ち、自分に返ってくるまでそう長い時間はかからなかった。自分もまた、「原爆文学」や「核エネルギー言説」に関する論文を

書き、それを「業績」に「研究者ゲーム？」を進めてきたのだから。最初に感じた嫌悪が、自分のシマを荒らされることを快く思わないヤクザの縄張り意識と変わらないのかもしれないと思うと、それがまた嫌になり、メディア知識人やメディアに対する同族嫌悪的感情は高まった。

そんな中、第三六回原爆文学研究会をコーディネートする機会に恵まれ、現在は戦後日本の核エネルギー言説の変遷をテーマに博士論文を執筆している。いまのところ、この問題について勉強し、考え、討議し、書いている間だけは、この問題からくる不快感から自由になることができているようだ。

先日、原民喜の『夏の花』を読んでいて、最後に唐突に付け加えられている「N」のエピソードのところ、急に視界が開けたような気がした。妻の死骸を求めて原爆投下直後の広島をさまよい回る「N」が、死体の顔を覗き込んで、これは妻ではないとうんざりし、それを繰り返して三日三晩を過ごす。ただこれだけの、ある意味では救いのない逸話に、妙に救われた。そのように感じたのは、一人称の語りが続いた後、語り手が消えて匿名の「N」の話に切り替わるところで、前述したような不愉快な自意識が「バット剥ぎ」とられたからだろうか。

十周年の企画に、ややナイーブなエッセイを寄せてしまい心苦しい限りである。研究会に研究者や院生が増えつつあると同時に、当初の目的であった市民に開かれた会にするという目標は、やや遠のきつつあると聞いた。会員の一人として、「研究」にこだわりのきつ、もつと気軽に発言し、書ける場にしていければと思っています。